

名古屋祇園うどん・きしめん調査



展示期間 令和元年六月十五(土)～六月三〇(日)

『名古屋市史 風俗編』(大正四年刊)によると、明治時代の年中行事として名古屋では旧暦六月十六日に「祇園^{ぎおん}饅^う飩^{どん}を食す」風習があつたそうです。

名古屋のことをトコトン調べる名古屋なんでも調査団では、祇園饅飩とはどのような風習であつたのかなど、名古屋名物のうどん・きしめんにまつわる風習や歴史を明らかにするため、史料調査及び来館者アンケートを実施します。

此地うどんはなはだよし

名古屋なんでも調査団の現在までの史料調査により、うどんは、遅くとも江戸時代には名古屋の名物であつたとわかっています。

例えば、江戸時代の戯作者（小説家）である曲亭馬琴は、その旅行記『羈旅漫録』に、「名古屋の天王祭霽宮に家々温飰を製すること恒例なり此地うどんはなはだよし」（「名古屋の天王祭」の記事の割注）と書いています。馬琴が名古屋に逗留したのは、享和二年（一八〇二）六月十二日から二六日のことで、このときに馬琴は名古屋のうどんに舌鼓を打つたことでしょう。

また、安永年間（一七七二・一七八一）における尾張の各分野において最上のものを列举したとされる『安永本邦萬姓司記』※一に、「**饅飰酒名所 天下一の味殊上手、酒又宜 本邦惣都**」とあることから、尾張人の自画自賛なのかもしれません。当時、名古屋（尾張国の都）のうどんは天下一の味で特別に美味しいと評判だったようです。

あやしく造りあしくその上小七八人きあぐりうのてさち
 て何やほり看板の人形のてくえせる。うきも五ツさすやい
 身うとかもせは。さて桶の穴より内をえまは。向ひハ隣堺
 の垣ふと引もらひ。廁物置も脇へ引く野原のてくさ。曠々
 たふふ。数十人忠臣藏夜討の体よのてちちくなくび居る。
 のどにかららうお俄ふり。警固のりけい上下を着てのら
 ぞ尻ふあらぐり。らの外毎夜さあぐの俳優をす。昼を崩し
 たふ所をほくろひ。夜をくまふりあらも小かる。その体甚ど
 のそぐ。又七月盆中。名古屋の市中。小兒ちひさなる万度と
 作り太鼓あぐまゆりありく。あきを梵天ぼんてんと名づく。大人も
 ちちト里七種々の俳優をあきとのふ。名古屋の天王祭宵宮ふ
 家々温純を製するト恒
 例あり此地うどん

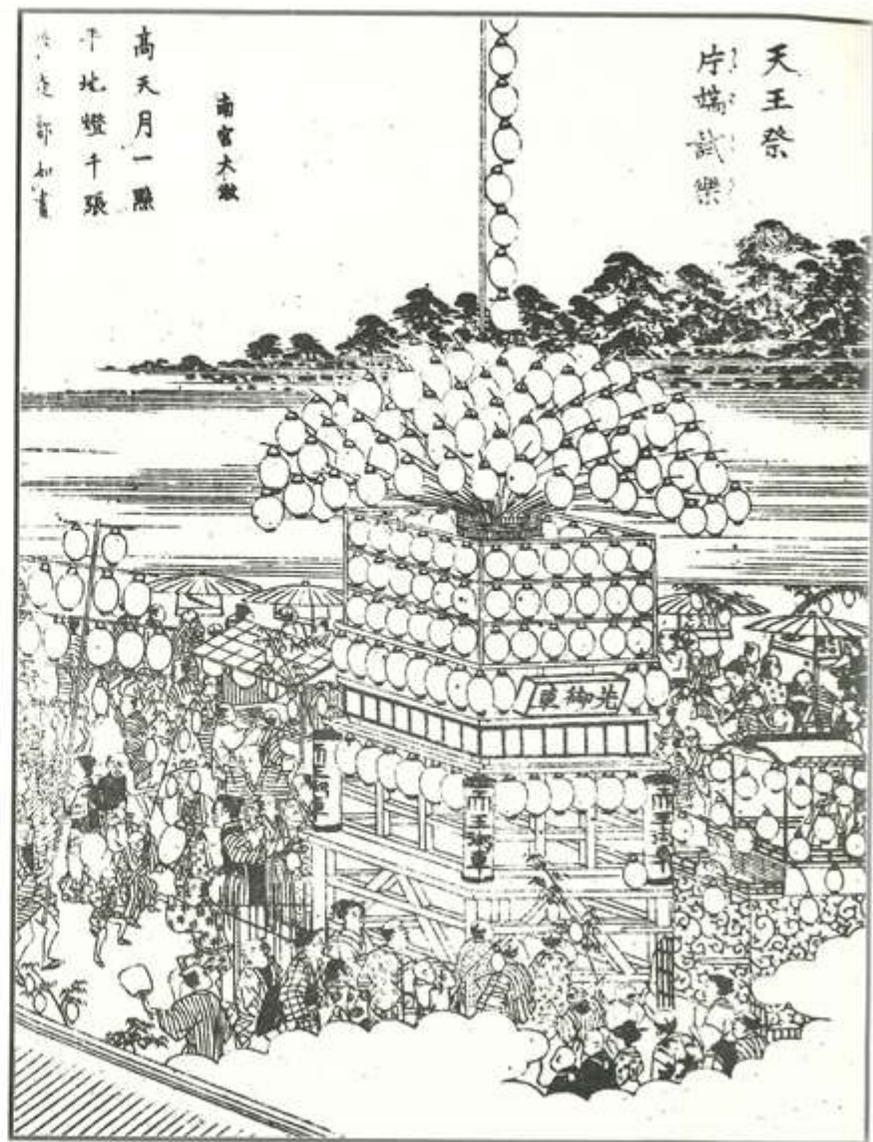
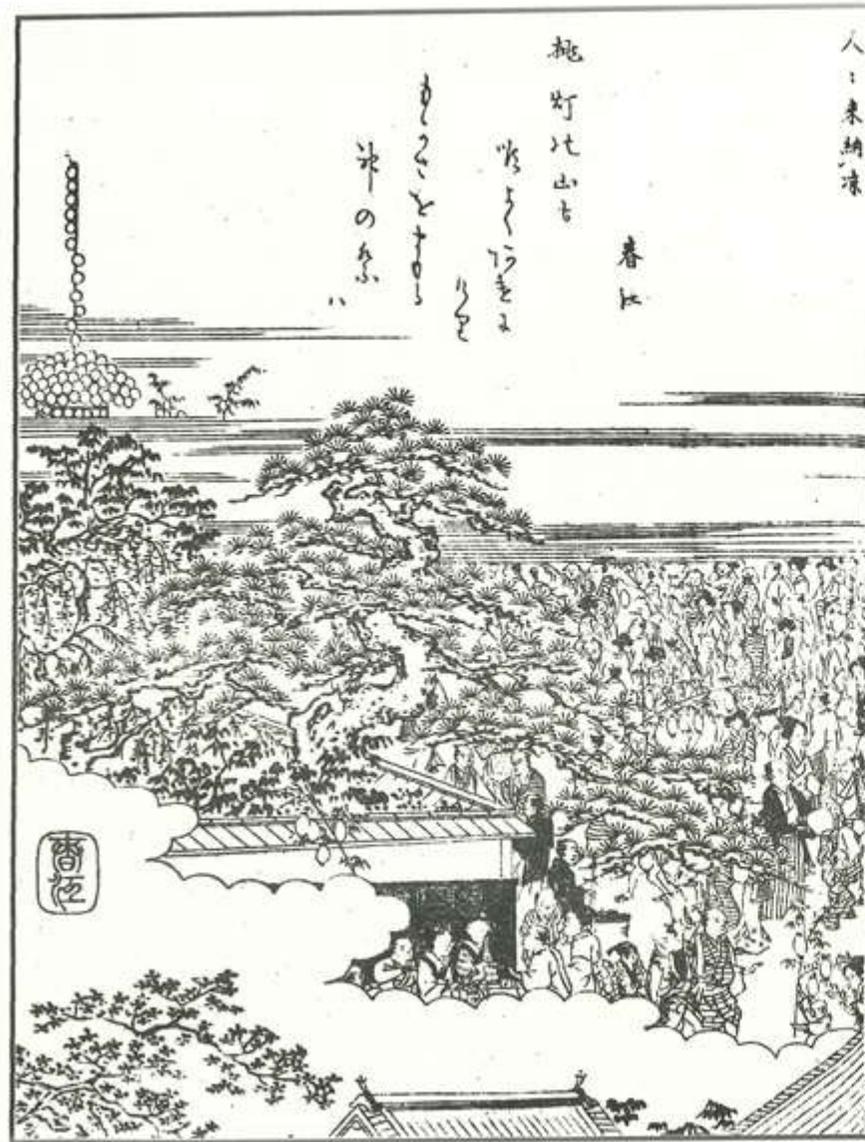
世一 津島の挑灯船 此條雨談ふらそりたれい省く

世二 藪お香の物 右よ同

世三 江州の大水 附攝河大水の噂

六月三日より雨あぐさそり暑気甚し。廿五日より雨
 少しくあきり。近在まか雪を予い。お時名古屋あり記。廿
 七日の朝来名。四日市辺。朝四ツ時頃ゆを雨あり。あきり
 せれ。宮をまきりありぬ。宮と嶋見は一兩年前よりゆを
 ちとちと。吉田の寄りの似せゆも。醜婦あり
 名古屋人らまどおりのと澤名せり。坂橋
 もあきと。旅人のその旅店へもあきり。廿七日お宮より乗船らの夕
 石薬師泊り。明朝より大雨。廿八日水口よ泊る。この夜すさ
 大風雨。廿九日の朝横田川水口より二里餘。せぐのきりうと。水
 て渡りあききを。せひなく昼頃又水口へ引くせり。餘の旅人
 を横田川の川端いづと。のよの建場茶屋へ泊るやうをな

『羈旅漫録』 「名古屋の天王祭」の末尾の割注部分に名古屋のうどんのことが書かれています。



『尾張名所図会 前編 卷之一』 「天王祭 片端試楽」

名古屋に逗留中の馬琴は六月十四日に津島の友を訪れて津島祭を見物しています。馬琴が再び名古屋に戻ったのは六月十六日午前のもので、残念ながら六月十五日夜の「天王祭 片端試楽」は見逃したようです。

織田信長の父、信秀は冷麺でおもてなし

江戸時代に名古屋がうどん先進地域となる素地は、織田信長の父、織田信秀の時代にはすでにあつたようです。天文二年（一五三三）七月、蹴鞠の伝授のため公卿の飛鳥井雅綱と山科言継が織田信秀のいる勝幡城を訪れたときのことです。信秀が二人の公卿のおもてなしにふるまつた料理は、「冷麺」でした。

このことは山科言継の日記（『言継卿記』）に記されていますが、この「冷麺」について、『日本めん食文化の一三〇〇年 増補版』（奥村彪生著 農山漁村文化協会 二〇一四年）は、「冷しそうめん（略して冷麺）」だとしています^{※二}。

また、山科言継の永禄十三年（一五七〇）八月十六日・十七日の日記には、友人との連歌会で酒の肴に「きしめん」を食べたことも記されています。ただし、この頃のきしめん（**碁子麺**）は「直径二・五センチぐらいの碁石型」をしていたそうで、きしめんの形が帯状に変わるの江戸時代のことでした^{※三}。

※二『日本めん食文化の一三〇〇年 増補版』二〇〇頁、※三同一二二頁

名古屋府下**六月十六日**、家々**冷麵**を嘗て時食とす

織田信秀が二人の公卿に冷麵をふるまった勝幡城は、現在の愛西市勝幡町と稲沢市平和町にまたがる地域と推定されています。したがって、名古屋近郊ではありませんが、名古屋での出来事ではありません。名古屋で冷麵が食べられていたことを記した史料としては、**天野信景**（江戸時代中期の尾張藩士）の『**塩尻**』があります。

博学多識の天野信景は、「かつて」名古屋城下（名古屋府下）には六月十六日に家々で冷麵を食べる風習があつたこと、そして、この風習は江戸時代に盛んであつた六月十六日の「**嘉定**」の年中行事や**牛頭天王**を祭る津島社で六月十六日夜に「**束葦を流す**」（津島神社の第一の秘祭とされる御葎流しの神事）のと同様に「**六月祓の遺風**」であると教えてくれます。

このことが書かれた巻之五は元禄十二年（一六九九）に執筆されたと推定^{※四}されていますが、「かつて」とあることから元禄十二年頃には冷麵の風習は途絶えていたのでしょうか。

『塩尻』 天野信景著

卷之五

問、名古屋下六月十六日、家々冷麵を嘗て時食とす、是何の謂ぞや。

曰、是嘉定の賀也。嘉定もと其起原を詳にせず、室町公方家の時より始るといふ。朝家今嘉通と称せらる、是納涼の会にして其実は六月祓の遺風なり。京都東河原及び下鴨の納涼、他境かゝる事ある事を聞侍らず。凡諸州此月天王祭をするもの皆六月祓なり。吾海部郡津島社六月十六日夜、束葦を流すもはらへつ物なりけり。牛頭天王疫をはらふ事を司賜ふとて国民まつるは本仏家の事なれども、中世より素盞烏尊に習合して蘇民将来の故事を云のみ。

『日本随筆大成 第三期十三』 日本随筆大成編集部 編

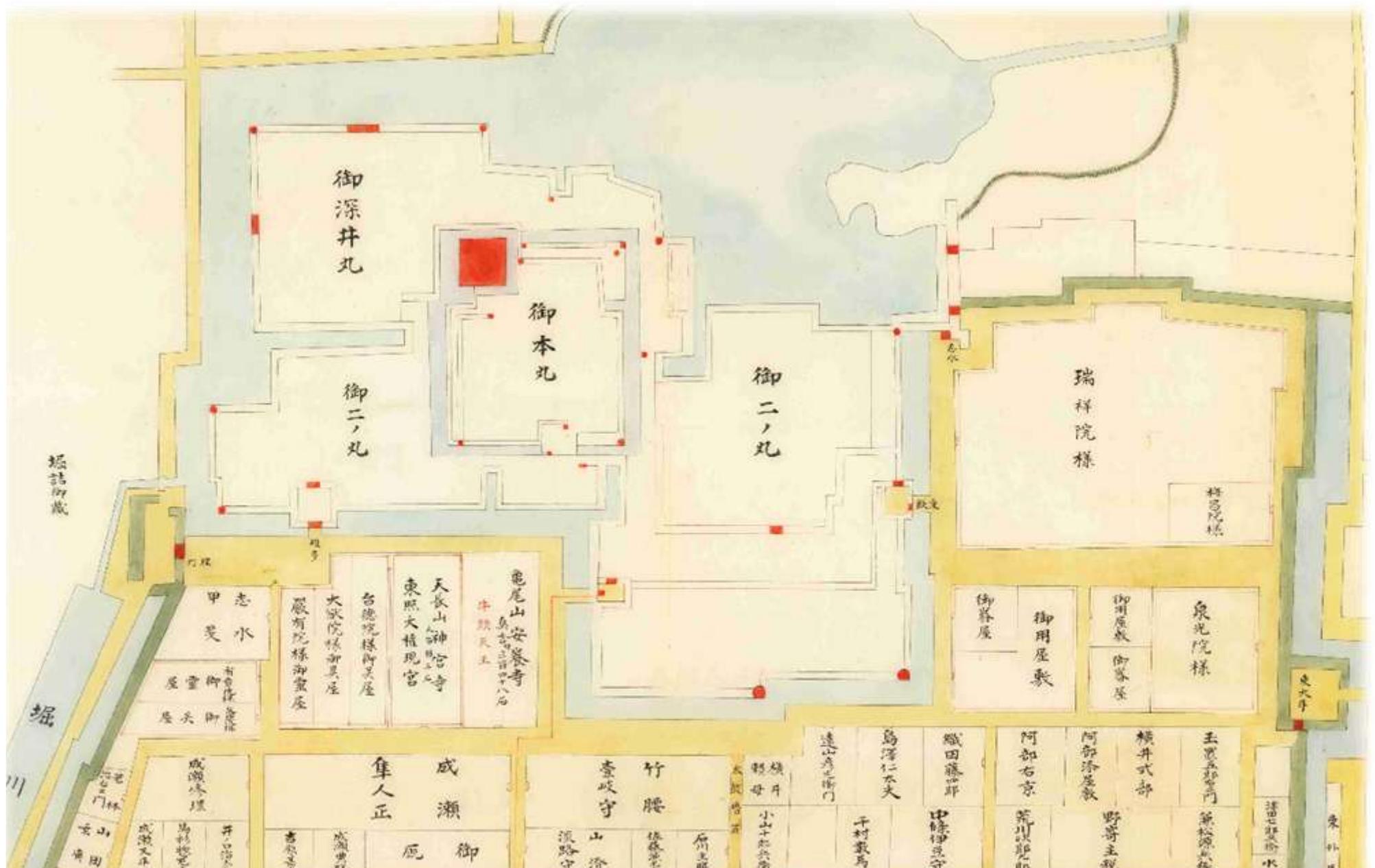
御城擁護の鎮守、府下の**氏神**

天野信景が六月十六日の冷麵の風習と関係があるとした牛頭天王は、もともとはインドの**祇園精舎**の守護神で、日本に伝来以降、御霊信仰とも結びつき、恐ろしい行疫神でありつつ防疫の神でもある^{※五}とされています。

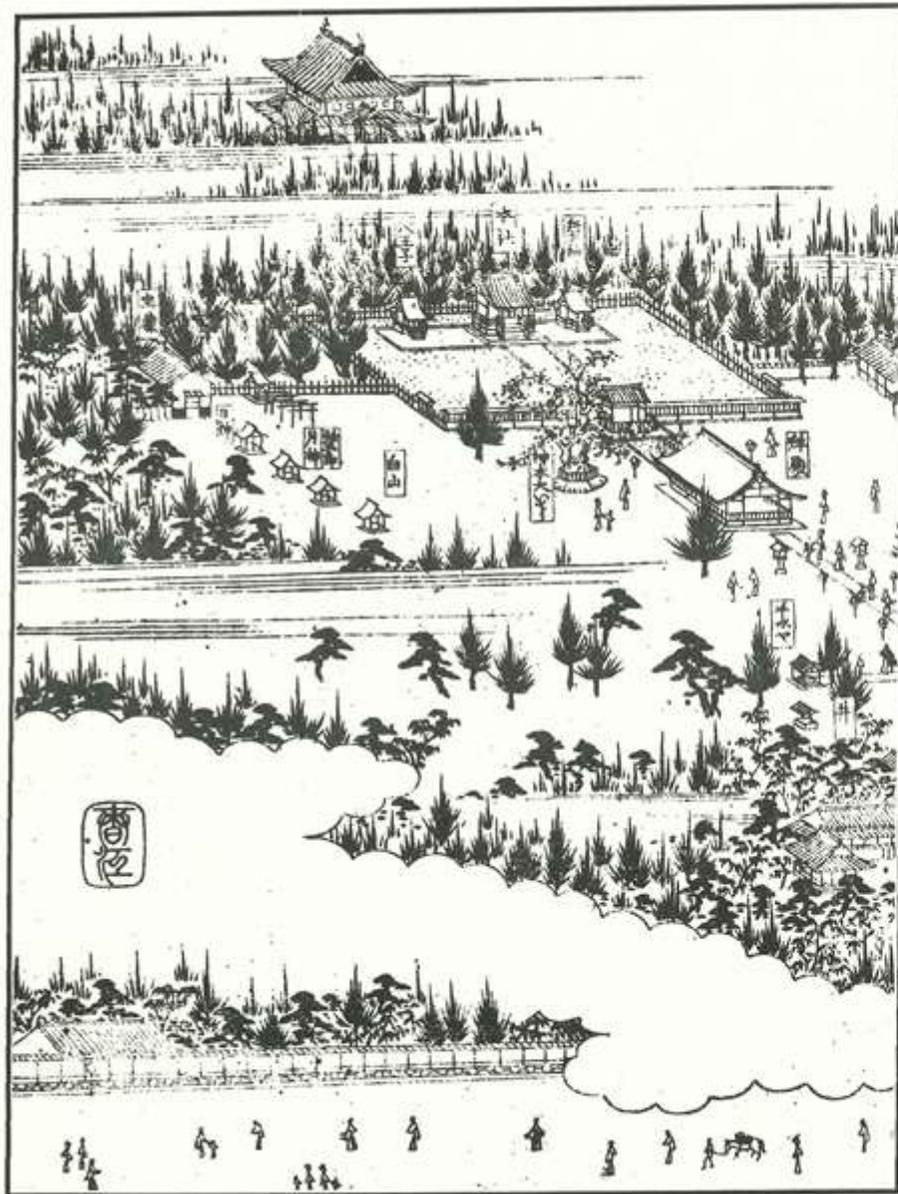
さて、この牛頭天王と名古屋はかなり深い結びつきがあることをご存知でしょうか。徳川家康を祭った東照宮の隣に位置する「**亀尾天王社**」の祭神は**素盞烏尊**ですが、その正体は**牛頭天王**だとされています。名古屋城築城にあたり、以前からこの地に鎮座していた天王社を他に遷すことが議論されました。しかし、人質時代を天王坊で過ごした家康の思召しにより神前でくじを行なった結果、他に遷すことはとりやめとなり、牛頭天王は「**御城擁護の鎮守、府下の氏神**」として祭られることになりました^{※六}。つまり、牛頭天王は名古屋の氏神だったのです。

※五 『日本怪異妖怪大事典』小松和彦監修 東京堂出版 二〇一三年

※六 『尾張名所図会 前編 卷之一』 天保十五年



『名古屋城三之丸図』（市 20-158）部分 赤い正方形が天守閣で、その南（下）に「牛頭天王」の文字があります。



『尾張名所図会 前編 卷之一』 「亀尾天王社」

亀尾天王社の本社の北（上）には名古屋城天守閣があります。境内には参詣の人々が描かれていますが、府下の氏神とされた亀尾天王社は、「小児の髪置 袴着をはじめ、詣人常に絶ゆる事なし」だったそうです。

牛頭天王の後は**歳徳神**

名古屋城の郭内にあった亀尾天王社は、明治九年（一八七六）に現在の中区丸の内二丁目に遷座し、明治三二年（一八九九）には**那古野神社**となりました。遷座はしましたが、江戸時代と同様に隣には東照宮があります。

ところで、最近は、牛頭天王よりもその後である**頗利采女**の方がより身近な存在なのかもしれない。近年盛んになった恵方巻きの恵方というのは、歳徳神のいる方位のことで、『簗簗内伝金烏玉兔集』によると、**頗利采女**がいる方位が「歳徳神の方」となるのです。

江戸時代、名古屋では**正月十八日**に**尾張四観音**のうち、その年の恵方にあたる観音を詣でる**恵方参り**の風習がありました^{※七}。したがって、名古屋では、観音の縁日である正月十八日（初観音）には牛頭天王の后がいる方位の恵方観音を詣で、六月十六日の牛頭天王の祭りの日には家々でうどんを食べたということになります。

史料に見る祇園饅餡の風習

冷麺からうどんへと微妙に変化していますが、名古屋で六月十六日にうどんが食べられていたことはいくつかの史料で確認できました。大正四年（一九一五）刊の『名古屋市史 風俗編』では「祇園饅餡」と表現されています。

「張州年中行事鈔」（『名古屋叢書三編 第八巻』） 二六八頁

自序明和六年（一七六九）

○嘉祥賜食

此日、諸士登城して餅餠等の賜物。土家戸々温
餡を製して家擧て食ふ。

「家例年中行事」（『ひがし 八号』） 二二頁

安永年（一七七二〜一七八一）写、弘化四年（一八四七）八月写改

一饅餡、打寄、心次第二上下ともいわる候事

『名古屋市史 風俗編』 年中行事 徳川時代 七二三頁

（六月曆） 十六日 嘉祥の祝儀登城、家々饅餡
を製して之を食す

『名古屋市史 風俗編』 年中行事 明治時代 七四三頁

（舊六月曆） 十六日 祇園饅餡を食す



名古屋祇園うどん・きしめん調査パネル展示資料

2019年6月15日

編集 名古屋なんでも調査団

発行 名古屋市鶴舞中央図書館

〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞一丁目1番155号

※史料調査及び来館者アンケートの結果は、令和元年9月7日（土）
開催予定の「名古屋なんでも調査報告会」で報告します。